



北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	高齢者の生活機能に焦点をあてた看護過程演習の授業方略に対する学生の学びと評価—講義とリンクさせた看護過程演習とフィードバックの取り組み—
Author(s)	木島, 輝美; 安川, 揚子; 武田, かおり; 水野, 智美; 奥宮, 暁子
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要, 第 13 号: 79-84
Issue Date	2011 年
DOI	10.15114/bshs.13.79
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6371
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	

- ・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- ・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- ・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

高齢者の生活機能に焦点をあてた看護過程演習の 授業方略に対する学生の学びと評価 ー講義とリンクさせた看護過程演習とフィードバックの取り組みー

木島輝美¹⁾, 安川揚子¹⁾, 武田かおり²⁾, 水野智美³⁾, 奥宮暁子¹⁾

¹⁾ 札幌医科大学

²⁾ 名寄市立大学

³⁾ 北海道医療センター附属札幌看護学校

本研究は、高齢者の生活機能に焦点をあてたアセスメントを学習させるために、老年看護の講義と看護過程演習をリンクさせた授業展開とチェックリストを用いたフィードバックを試行したことによる学生の学びと授業方略への評価を明らかにすることを目的とした。

対象はA大学看護学科の3年生で老年看護活動論を履修した者のうち研究同意が得られた49名(89.1%)であった。データ収集は看護過程演習の進め方とその学びについての自由記載のアンケートを実施した。結果は、講義と看護過程演習をリンクさせた授業展開について9割の学生が「理解が深まりアセスメントの視点が明確になった」と肯定的にとらえていた。そしてフィードバック方法については7割の学生が「自分の不足点を客観的に捉えることができた」と評価していた。また学生は高齢者のできる部分に着目する重要性にも気づいており、生活機能の視点を養うことができた。以上より、今回試行した授業展開とフィードバック方法の有効性が示された。

キーワード：高齢者 生活機能 看護過程 アセスメント 教授法

Effects on Students' Learning and their Appraisal of a Teaching Strategy Used for Nursing Process Exercise Focusing on How to Assess Functioning of the Elderly - Benefits of Lecture-Linked Nursing Process Exercise and Feedback

Terumi Kijima¹⁾, Yoko Yasukawa¹⁾, Kaori Takeda²⁾, Tomomi Mizuno³⁾, Akiko Okumiya¹⁾

¹⁾ Sapporo Medical University

²⁾ Nayoro City University

³⁾ National Hospital Organization Hokkaido Medical Center Sapporo School of Nursing

A trial was carried out of a teaching strategy which was designed to teach how to make assessment of elderly patients with a focus on their functioning, and an analysis was made on the effects on students' learning and their appraisal of such teaching. The strategy linked classroom lecture on gerontological care to nursing process exercise and included feedback using a checklist.

The third year students of the Department of Nursing of a certain university who had taken the gerontological care course were invited to participate in the survey. 49 of them (89.1%) who had agreed to participation were asked to freely make comments on a questionnaire form about the structure of the teaching and their learning from it. 90% of them gave a positive feedback saying that they gained a clearer understanding of what they should focus in making assessments. 70% of the respondents found the feedback opportunity invaluable in that it helped them identify their weaknesses. The students understood how functioning should be assessed, recognizing the importance of observing what faculties the elderly had maintained.

The findings confirmed the effectiveness of the present teaching strategy and feedback system.

Key words : the elderly, functioning, nursing process, assessment, teaching method

Bull. Sch.Hlth.Sci.Sapporo Med. Univ 13:79-84(2011)

I. はじめに

厚生労働省の「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書（平成19年4月16日）」によると、老年看護学では特に、生活機能の観点からアセスメントし看護を展開する方法を学ぶことが重視されており、平成20年度の看護師教育課程の指定規則の改正に伴い指導要領にも反映されている¹⁾。また、世界保健機関（WHO）の「国際生活機能分類（ICF）」では、生活機能を「心身機能・身体構造」「活動」「参加」の3つのレベルで統合的にとらえ、プラス面を重視してマイナス面をもプラス面の中に位置づけてとらえることを提唱している²⁾。これまでA大学の老年看護学では、疾患や障害だけに焦点をあててではなく、ICFの考え方を基盤として高齢者の生活機能とその影響要因に着目して講義を構成してきた。しかし、学生は実際に看護過程を展開する際に、各日常生活行動（食事、排泄、運動など）のアセスメントで、生活機能に着目して系統的に情報収集し、分析・解釈を進めることが難しかった。その背景として、老年看護学の各論講義と並行して看護過程演習を行っていたため、学生はまだ講義を受けていない内容を含めて事例を理解しなけりなかつたことも学習を困難にした一要因であったと考えられる。先行研究でも学生にとってのアセスメントの困難性について指摘されているが³⁾、特に老年看護領域のアセスメントにおいては、高齢者の複雑な病態の理解と高齢者が示す行動に関連する多様な因子を検討することが困難であると報告されている⁴⁾。これらは高齢者の生活機能への影響要因を分析し、高齢者の個別性を理解する上で重要である。石塚⁵⁾は、学生が看護過程のアセスメント段階の理解を深めるためには、カリキュラム上の工夫や看護過程演習時間内に学生が共通理解できる場を設けるなどの必要性を述べている。

そこで本研究では、高齢者の生活機能に焦点をあてたアセスメントを学習させるために、老年看護の講義と看護過程演習をリンクさせた授業展開とチェックリストを用いたフィードバックを試行したことによる学生の学びと授業方略への評価を明らかにすることを目的とする。

II. 看護過程演習の概要

看護過程演習は、3年生前期に開講している「老年看護活動論」という2単位45時間の科目の中で実施した。看護過程演習の目的・目標は表1のとおりである。実際の看護過程演習では、看護診断／健康課題の抽出および援助計画の立案と技術演習による実施・評価もしているが、今回は、アセスメントの情報収集、分析・解釈の段階において新たな演習方法を試みたので、その点を中心に述べる。

看護過程演習では、紙上事例として認知症と片麻痺がある高齢男性（E様）を提示し、各日常生活行動（食事、排泄、運動など）および認知症の2時間の講義終了後に、その内容にリンクしたアセスメント演習を1時間定期的に組み入れた。＜例：高齢者の排泄機能についての講義終了後に、排泄パターンについてのアセスメントを実施する（表2参照）＞

学生のアセスメント記録は、講義の1週間後に提出させた。そして、著者らが作成したアセスメントの視点に関するチェックリスト（図1）をもとに教員が評価し、1週間後にフィードバックして修正させることを繰り返した。フィードバック方法は、チェックリストに○・△・×印と簡単なコメントを記入して個人に返却するとともに、クラス全体に対して良くできていた点や不足しがちな点についての傾向を伝えた。また、学生には看護過程演習オリエンテーション時に記録提出スケジュールを提示した。

なお、アセスメント枠組はA大学の基礎看護学の看護過程演習で使用されているゴードンの機能的健康パターン分類を用いた。

また3年生前期には、他領域の看護過程演習も開講されており、学生は並行して複数領域の紙上事例の看護過程に取り組んでいた。

III. 方 法

対象は、A大学看護学科3年生の老年看護活動論を履修した55名のうち研究同意の得られた49名（89.1%）であった。アンケートの依頼および実施日は看護過程演習最終日である2009年7月22日であった。データ収集方法は、看護

表1 老年看護活動論看護過程演習の目的・目標

I. 目的

高齢者の特徴をふまえた看護過程の展開について理解することができる。

II. 学習目標

1. 高齢者の加齢による変化と疾患を理解し日常生活に影響を及ぼしている状況をアセスメントすることの重要性を理解できる。
2. 高齢者の発達上の特性、生活習慣、環境や生活歴の観点から日常生活の状況をアセスメントすることの重要性を理解できる。
3. 高齢者やその家族が体験している心理・社会的変化についてアセスメントすることの重要性を理解できる。
4. 1～3に関連付けて必要な看護診断／健康課題を考えることができる。
5. 高齢者の個別性を踏まえて、自立に向けた看護計画・評価を考えることができる。

表2 老年看護活動論看護過程演習スケジュール

月日	講目	学習内容	方法	記録提出	フィードバック
4/15 (水)	1-2	老年看護学 概論	講義		
	3	高齢者の生活の場	講義		
4/22 (水)	1-2	高齢者の認知機能	講義		
	3	看護過程演習オリエンテーション	看護過程演習		
5/13 (水)	1-2	高齢者の嚥下機能	講義		
	3	嚥下機能のアセスメント	看護過程演習		
5/20 (水)	1-2	認知症の理解(医学編)	講義	健康管理 嚥下機能	
	3	認知症のある高齢者への看護Ⅰ	講義		
5/27 (水)	1-2	高齢者の栄養	講義		健康管理 嚥下機能
	3	栄養状態・嚥下機能のアセスメント	看護過程演習		
6/3 (水)	1-2	高齢者の排泄機能	講義		
	3	排泄機能のアセスメント	看護過程演習		
6/10 (水)	1-2	認知症のある高齢者への看護Ⅱ	講義	栄養代謝 排泄	
	3	認知機能のアセスメント	看護過程演習		
6/17 (水)	1	内科治療を受ける高齢者への看護	講義	認知機能	栄養代謝 排泄
	2	褥瘡のある高齢者への看護	講義		
	3	褥瘡のアセスメント	看護過程演習		
6/24 (水)	1-2	高齢者の運動機能	講義		認知機能
	3	運動機能のアセスメント	看護過程演習		
7/1 (水)	1-3	統合および計画立案	看護過程演習	活動運動 統合	
7/8 (水)	1	高齢者の尊厳・虐待	講義	援助計画	活動運動 統合
	2	終末期にある高齢者と家族への看護	講義		
	3	外科治療を受ける高齢者への看護	講義		
7/15 (水)	1-3	運動機能に障害のある高齢者への移動および排泄援助	技術演習		
7/22 (水)	1-3	最終記録提出日	看護過程演習	全記録	

平成21年度 老年看護活動論 看護過程演習 運動機能のアセスメントのポイント

学籍番号 _____ 学生氏名 _____

()に○がついているところは良く書けています。
△×印がついている項目があなたの不足点です。もう一度見直してみましょう。

●E様の日常生活活動についてはどうですか？

() 移動動作(歩行、移動、立位保持、寝返り、など)

() 摂食動作【栄養→代謝 パターン】

() 排泄動作【排泄パターン】

() 清潔動作(洗面、口腔ケア、入浴、更衣、など)

() FIMとの関連について

() リハビリテーションの様子について

() レクリエーションの様子について

() その他()

●E様の運動機能の低下に関連していると考えられる要因は何ですか？

() 加齢との関連について

() 疾病との関連について

() 麻痺との関連について(Brunnstrom Stageとも関連させて)

() 筋力の低下について

() 認知機能との関連について

() 援助方法について

●その他、運動機能に関して気になることはありませんか？

() 転倒リスクアセスメント

() 活動時の注意点について(疾患との関連、服用中の薬剤、活動に必要なエネルギー量の確保など)

() できないのは身体機能によるものか、認知機能によるものかの見極めについて

() 訓練室でのリハビリテーションと日常の介助のギャップについて

() 現在の活動状況から機能低下をまねく危険性は？

() E様がADLを拡大できる可能性について

●今後の方向性についても考えていますか？

() 不足している情報はありますか？それをどうやって情報収集しますか？

() 過去(自宅等)の状態と比較してどうですか？

() 現在の問題に対して今後どのような方向性でケアする必要がありますか？

図1 フィードバック・チェックリスト
(活動一運動パターン)

過程演習の進め方について、看護過程演習を通して学んだこと、理解しにくかったことについて、自由記載の記名式アンケートを実施した。分析は、記載内容から一つの意味をなす文節を抽出し、類似性と差異を比較検討し、類似した意味をもつものを集めて抽象度を高めた。

IV. 倫理的配慮

学生には、データは学生氏名が特定できない形で分析するため匿名性が確保されること、記載内容や研究協力の可否が成績には一切影響しないことを書面と口頭で説明し、書面に同意を得た。

V. 結果

学生のアンケートを分析した結果は以下の通りであった。(表3参照)

1. 看護過程演習の運営方法について

看護過程演習の運営方法については、9割の学生が「講

表3 老年看護活動論 看護過程演習 アンケート結果

Q1. 「老年看護活動論 看護過程演習」の進め方についていかがでしたか？	件数	%
講義とリンクしながら部分的に進めたことで理解が深まりアセスメントの視点が明確になった	44	89.8
教員からのポイントごとのフィードバックにより自分の不足している部分を客観的に捉えることができた	33	67.3
進行速度は適切であり記録提出スケジュールを示してしてくれたので計画的に学習を進めることができた	14	28.6
毎回提出するアセスメントの量にばらつきがあり後半につまって大変だった	9	18.4
認知機能はすべてのパターンに含まれるので最初に講義をしてアセスメントしたほうが良い	8	16.3
教員間で採点基準が一致していなかった	4	8.2
自分が書いた内容を忘れない内にフィードバックされた	3	6.1
Q2. 高齢者を対象とした看護過程演習を通して学んだことは何ですか？	件数	%
加齢による身体・精神的変化について	13	26.5
高齢者の長い人生経験に目を向けて尊重することの大切さ	11	22.4
高齢者の多くの既往歴を考慮することの重要性	7	14.3
できる部分を維持しもてる力を引き出す援助の大切さ	7	14.3
認知機能の低下によるセルフケア能力への影響について	7	14.3
認知症の方への援助について	6	12.2
一つの現象に加齢・疾患・認知機能・人生背景など様々なことが関連していること	5	10.2
できるところ・できないところを細かくみていく必要性	4	8.2
Q3. 高齢者を対象とした看護過程演習を通して理解しにくかったことは何ですか？	件数	%
認知症や麻痺のある対象者のイメージがつかない	11	22.4
認知症の疾患理解が難しい	7	14.3
身体機能や認知機能など多くの要素を関連させて考えることが難しい	5	10.2
認知症が日常生活へどのように影響を及ぼしているのかを分析するのが難しい	5	10.2
認知症の人がどの程度まで分かっているかの判断が難しい	5	10.2
ADLの低下が運動機能低下によるものか認知機能低下によるものか見極めが難しい	4	8.2
各機能的健康パターンで認知症の影響を考えながらアセスメントをするのが難しい	4	8.2
様々なスケールの活用が難しい	4	8.2
高齢者がどこまで自分でできるのかを見極めて目標を設定するのが難しい	4	8.2
過去の生活と関連づけて現在の状態をアセスメントするのが難しい	3	6.1

n=49

義とリンクしながら部分的に進めたことで理解が深まりアセスメントの視点が明確になった」ととらえていた。また、7割の学生が「教員からのポイントごとのフィードバックにより自分の不足している部分を客観的に捉えることができた」と述べていた。なかには、「自分が書いた内容を忘れない内にフィードバックされた」との意見もあった。また3割の学生から「進行速度は適切であり記録提出スケジュールを示してしてくれたので計画的に学習を進めることができた」という意見があった。しかし一方で、「毎回提出するアセスメントの量にばらつきがあり後半につまって大変だった」や、「認知機能はすべてのパターンに含まれるので最初に講義をしてアセスメントしたほうが良い」、「教員間で採点基準が一致していなかった」などの指摘もみられた。

2. 看護過程演習を通しての学び

看護過程演習を通して学んだことは、「加齢による身体・

精神的変化について」や「高齢者の長い人生経験に目を向けて尊重することの大切さ」に加え、「高齢者の多くの既往歴を考慮することの重要性」や「一つの現象に加齢・疾患・認知機能・人生背景など様々なことが関連していること」などをあげていた。また、「できるところ・できないところを細かくみていく必要性」や「できる部分を維持しもてる力を引き出す援助の大切さ」という気づきもあった。そして、「認知機能の低下によるセルフケア能力への影響について」や「認知症の方への援助について」という認知症に関する理解についても述べられていた。

3. 看護過程演習を通して理解しにくかったこと

看護過程演習を通して理解しにくかったことは、2割の学生が「認知症や麻痺のある対象者のイメージがつかない」であった。また、「認知症の疾患理解が難しい」「認知症が日常生活へどのように影響を及ぼしているのかを分析するのが難しい」、「認知症の人がどの程度まで分かっているか

の判断が難しい」、「ADLの低下が運動機能低下によるものか認知機能低下によるものか見極めが難しい」、「各機能的健康パターンで認知症の影響を考えながらアセスメントをするのが難しい」など、約半数の学生が、認知症による生活への影響に関連した内容をあげていた。その他、「身体機能や認知機能など多くの要素を関連させて考えることが難しい」、「過去の生活と関連づけて現在の状態をアセスメントするのが難しい」、「高齢者がどこまで自分でできるのかを見極めて目標を設定するのが難しい」、「様々なスケールの活用が難しい」があげられていた。

VI. 考 察

1. 授業方略についての学生の評価

1) 講義と看護過程演習をリンクさせた授業展開について
講義にリンクさせたアセスメントの方法については、多くの学生が肯定的に受け止めていた。特に、最初から全ての機能的健康パターンをアセスメントさせるのではなく、各日常生活行動について一つずつ講義とアセスメントをリンクさせて進めたことにより、各パターンに必要なアセスメントの視点を明確にすることができたといえる。また、受動的な講義の直後にアセスメントを実施して能動的に知識を活用したことで、理解の深まりや記憶の定着にも効果的であったと考えられる。

また、A大学の3年生前期は他領域の看護過程演習も並行して行われており、学生は過密スケジュールの中で自分なりに課題の優先順位を検討しながら進めている。そのため、課題の提出スケジュールを事前に提示したことは、学生の効率的な学習に寄与したものと考えられる。

2) チェックリストを用いたフィードバックについて

矢作⁷⁾は、看護過程の教授法についての文献レビューの中で、学生自身の捉え方を客観視させる「振り返りの重要性」を見出していた。今回の看護過程演習のフィードバックにおいてチェックリストを用いて各学生の良い点と不足点を明確化して紙面に残したことは、学生が客観的に自己の振り返りをするために効果的であったと考えられる。また教員からのフィードバックには、1名の教員が数十名の学生記録を確認するために1週間という期間を必要とした。しかし、学生の記憶保持やモチベーションの維持を考慮すると、フィードバックの時期は学生が記録を作成してからより短期間であることがのぞましいと推測される。矢作⁷⁾は、時期については明確に述べていないが「タイムリーな指導」が学生の混乱を早期に解消し学習効果を促進としている。今回の結果では、1週間という期間は学生の関心を低下させない範囲であり、集団指導の限界の中でも効果的な指導につながったといえる。

一方で、複数教員で記録評価を分担したことにより評価基準に多少のばらつきがでたことは否めないため、今後は教員間の情報交換を密にするなどの改善が必要である。し

かし、看護過程演習の途中経過での教員からの指導は今後の修正に向けての示唆であり成績には直接影響しない点を強調することで、学生が途中での指導に一喜一憂することなく前向きに受けとめることにつながるのではないかと考える。

2. 看護過程演習を通しての学生の学びについて

今回の看護過程演習からの学びは、加齢による心身の変化や、高齢者を尊重することの重要性といった基本的なことはもちろんのこと、障害やできないことばかりに着目するのではなく、できる部分に着目することの重要性を学んでいた。これは、まさにICFの提唱するプラス面に着目した生活機能の視点²⁾を養うことにつながったといえる。

また、一つの現象に加齢・疾患・認知機能・人生背景など様々なことが関連していることについて理解できたことにより、先行研究において高齢者のアセスメントの困難性の一つにあげられていた「高齢者が示す行動の多様な関連因子の検討の困難さ」を軽減することができたと考えられる。

一方、認知症高齢者は2015年までに250万人、2025年には323万人になると推計されており⁶⁾、老年看護を考える上で認知症の理解は重要な位置を占めている。今回の事例(E様)は認知症をもつ高齢者であったため、アセスメントする上で認知症の理解と認知機能の低下が様々な日常生活行動に及ぼす影響を考慮する必要性を学ぶきっかけになったといえる。しかし反面、「理解しにくかったこと」として認知症に関することをあげる学生も多かったことから、高齢者のアセスメントにおいても一つの困難性としてあげられていた「複雑な病態の理解」のなかでも特に認知症の理解が難しいことが示唆された。認知症を持つ対象者に初めて触れる学生にとって、その病態の複雑さと生活への影響の多様さを理解するには課題が残ったといえる。よって今後は、運営方法についての学生の意見にあったように、認知症の講義やアセスメントの時期を工夫するなど認知症の理解に重点をおいた看護過程演習の工夫が必要である。

また、認知症の方や麻痺のある方に出会ったことがない学生にとって、紙面情報だけで事例をイメージすることが難しかったようである。今後は、紙面情報だけでなく映像なども取り入れた事例提示を行うことにより、対象者のイメージをつかみやすくすることも必要であると考えられる。

VII. おわりに

老年看護の講義にリンクさせた看護過程演習の方法については、多くの学生が肯定的に受け止めていた。そして、チェックリストにより各学生の良い点と不足点を明確化し、紙面に残したことは、学生の振り返りに効果的であった。また、高齢者のできる部分に着目し、生活機能の視点からアセスメントすることの重要性を学ぶことができた。しか

し、認知症を持つ対象者に初めて触れる学生にとって、紙面情報ではイメージをつかみにくく、認知症の病態の複雑さと生活への影響の多様さは理解が難しかった。今後は、認知症の理解を深める看護過程演習構成の検討と、対象者のイメージをつかみやすくする工夫が必要である。

引用文献

- 1) 厚生労働省:看護基礎教育の充実に関する検討会報告書(平成19年4月16日).2007.<2010.9.21アクセス>
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>
- 2) 上田 敏:ICF(国際生活機能分類)の理解と活用—人が「生きること」「生きることの困難(障害)」をどうとらえるか. 東京, きょうされん, 2005, p15-29
- 3) 鈴木のり子, 高木文子:臨床実習での看護診断過程における学生の困難とその原因. 日本看護学教育学会誌 12 (1):11-17, 2002
- 4) 松本佳子, 高野真由美, 山之井麻衣:老年看護方法における看護過程演習の振り返り—学生の看護過程自己評価アンケートの分析—. 川崎市立看護短期大学紀要 14 (1):91-102, 2009
- 5) 石塚敏子:看護過程のアセスメント段階における学生の理解度を高める教授法の検討.新潟医療福祉学会誌 7 (1):10-19,2007
- 6) 厚生労働省:高齢者介護研究会報告書「2015年の高齢者介護」(平成15年6月) 補論3 痴呆性高齢者ケアについて, 2003. <2010. 9. 26アクセス>
<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou/15kourei/3c.html>
- 7) 矢作房:看護基礎教育における「看護理論と看護過程の展開の教授方法」に関する文献的考察.神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究集録 35:68-75, 2010